



「犬養万葉記念館交流展」を開催

2020年も4月より越前市万葉館で交流展「万葉の植物を楽しむ」を開催しました。相互の発展と交流を深める機会もはや3回目となりました。しかし休館時期があり、展示期間が延長されましたので急遽展示替えをしました。寒冷地にはめずらしい夏の花「浜木綿」をご紹介したところ、なんと万葉館の一角にある万葉菊花園の温室で人知れずハマユウが咲いていたのです。地元でも話題となりそれが新聞記事に！楽しいハプニングでした。

記念館で歌碑マップと絵本を制作しました



4月、コロナ禍による全国に発令された緊急事態宣言で、犬養万葉記念館もやむなく休館した時期がありました。その時間を利用して犬養歌碑のみならず、長年懸案だった明日香村内にある万葉歌碑を網羅した歌碑マップ「明日香村の万葉歌碑を歩く」を作ることができました。多くの方に利用して頂きたく無料で配布しています。



記念館で開催した万葉ファンの主婦、つづきあつこさんが描かれたイラストつき「万葉絵本」の原画展がたいへん好評で、とうとう記念館で「絵本」として発行・販売に至りました。引き続き、イラストによる「古代人物名鑑」も準備中です。どうぞお楽しみに。

これからの予定

- 3月7日(日) 万葉植物野外講座
- 3月28日(日) 第22回 若菜祭及び神事
講演：山内英正氏・富田敏子氏
- 9月～11月(詳細未定)
「第4回 犬養万葉記念館交流展」
開催：福井県越前市万葉の里
味真野苑資料館 万葉館にて
- 毎月1回 万葉講座
- 毎月1回 みんなで歌おう童謡唱歌

※ 広報あすかで毎月お知らせをしています。詳細は、ホームページでご確認いただくか、直接お問い合わせください。

編集後記

- ★ 一年ぶりの通信発行となりました。年号「令和」で『万葉集』が注目を浴び、昨年3月にはNHKのプラタモリで明日香村が紹介され、待たれた桜の季節には自粛期間となり…。しかしライトアップやイベントがなくても桜の光景はいつも以上に清々しく、美しく、ひときわ心に残った春となりました。
- ★ 春からの全館あげでの「犬養孝令和記念特別展示」も休館中はYouTubeで紹介しながら、9月まで延長展示をいたしました。また、恒例の富山県高岡市の「万葉集全20巻朗唱の会」は昨秋は動画投稿をリレー方式で実施されましたが、記念館が急遽応募準備のための動画撮影のスタジオとなり、出場者を通して施設をご紹介するよい機会となりました。
- ★ 「犬養先生と飛鳥」は今回で最終回となりました。長らく執筆してくださいました犬養万葉記念館に協力する会代表の山内英正さんには心より感謝申し上げます。貴重な記録ですので記念館では後日あらためて1冊にまとめたいと思っております。

発行者：南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館
〒634-0111 奈良県高市郡明日香村岡1150 tel:0744-54-9300 fax:0744-54-4200
Eメール: info@inukai.nara.jp ウェブサイト: http://inukai.nara.jp
発行責任者：岡本三千代(館長)

初恋を思うべし

南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館 NO.11 (2021年3月1日号)

みなさま、お変わりございませんか。昨年はずりせぬコロナ感染症の影響で、犬養万葉記念館はおろか日本中が日常を失い、また年間行事、恒例行事、イベントすべてが予定通りに行くことのできない不安定な1年を過ごしました。新天皇即位の喜びと共に『万葉集』からの典拠による年号「令和」の決定で、2020年は私たち万葉ファンにとりましては、オリンピック以上に再び万葉元年としての期待と活気を期待していましたが、口惜しい思いが残りましたが、2021年を迎えていただいまより新たな思いで臨んでおります。「初恋通信」も昨年は1回しか発行できませんでした。いよいよこの第11号で「犬養先生を語る」シリーズも最終回となりました。新年度からは犬養万葉記念館の体制も少し変わりますので、従来の「若菜祭」も今回で一区切りとし、3月中に開催の運びとなりました。犬養先生が好まれた島崎藤村の言葉に「すべてのものは過ぎ去りつつある。

その中であって多少なりとも「まこと」を残すものこそ、真に過ぎ去るものと言うべきである」があります。長らく「若菜祭」行事を続けてきた私たちが、犬養先生を顕彰し、偲び、それぞれが初心にかえる機会「真に過ぎ去る」ことになりませんが、犬養万葉記念館の在り方にもあてはまるのではないかと思います。また新年度から新たに臨む犬養万葉記念館にもご期待ください。

記念館歳時記



6月、猪熊兼勝先生講演会
昨年の若菜祭は残念ながら中止となったため、講演会のみ、かなびホールにて開催いたしました。会場の感染対策に緊張感が漂う機会でしたが、猪熊先生の豊富なご経験を通して語られた古代ロマンの魅力に引き込まれたひとときでした。



万葉植物野外講座
人気の高いこの講座はコロナ禍が少し収まった9月と11月に2回開催しました。季節の植物観察だけではなく馬場吉久講師が案内される一味違った「明日香村散策」も大きな魅力です。今春の3月は初めて明日香村を飛び出し、「桜井市の巻向の梅」をめざして歩きます。



2021年版 万葉花カレンダーを制作！
記念館のささやかな庭でも万葉植物が季節を告げてくれます。初夏のあざさと共にプランターの彼岸花も紅白2色咲きました。あまりに美しいので今回の表紙に採用！身近な植物ばかりですが、1年を通して万葉人の目線で楽しんでいただきたいと思います。



高岡市万葉まつりに参加しました
全国の万葉故地の恒例行事が延期・中止となった中で、高岡市では全国から万葉朗唱の動画を募り、万葉まつり当日にリレー形式で配信するという卓越した知恵で開催。明日香村からはさおとめたちが参加。記念館で撮影しました。



岡本館長がんばる！
「館長講座」「みんなで歌おう童謡唱歌」と、2つのカルチャーも定着しました。フェイスシールドをつけての歌唱も初めて経験しました。犬養万葉の楽しさを体験して頂くこと、また喜びや悲しみも「歌は心の音楽である」ことを実感して頂きたいです。

犬養先生の碑



昨秋、中尾山古墳が八角墳で、文武天皇陵であろうと発表されました。文武の父、草壁皇子が亡くなった後追慕した舎人の碑がかつての嶋の宮を見下ろした高台にあります。

⑪⑧ 嶋の宮 上の池なる 放ち鳥
荒びな行きそ 君いまさずとも
(巻2-172 草壁皇子の宮の舎人)

2019年12月に、朝日新聞社奈良支局の加治隼人記者から驚きの電話があった。戦争末期に犬養孝先生が田邊幸雄に宛てた手紙16通と葉書25通、計41通が松阪市の古民家で見つかったという。この古民家は田邊の妻の兄(元、三重県立津高等学校国語教諭)が住んでいた。この民家を購入した児童文学作家の村上いこさんが、押し入れの中から書簡の入った古いミカン箱を発見した。御子孫が転居する際に気がつかなかったのであろう。

犬養は1932年に東京帝国大学を卒業し、同年神奈川県立第一中学校(現、神奈川県立希望ヶ丘高等学校)教諭、1942年に台北高等学校教授となった。田邊は1936年に卒業して須坂高等女学校(現、長野県立須坂東高等学校)教諭となり、のち東京都立第十五中学校(現、都立青山高等学校)教諭となった。二人は先輩と後輩であったが気があった。共に『万葉集』研究に志し、夏休みになると北アルプス登山に出かけた犬養は、須坂の田邊家に立ち寄り山談義に興じた。田邊から横浜の犬養の元に信濃のリンゴやブドウがしばしば送られてきたので、これらの短文の礼状もあると加治記者は言う。私は単なる礼状以外の書簡9通の内容精査に協力した。そして『朝日新聞』大阪本社版夕刊(2019.12.28)のみに特ダネとして、「万葉学者現地主義にむく書簡」として報道され、岡本三千代館長と私のコメントも掲載された。

本稿では、紙幅の関係で横浜時代の5通の書簡の概要を紹介する。生前の犬養先生から私がお聞きしていた話と結びつく内容もあり、先生の完璧に近い著作目録を作製したこともあるので、私自身興味深く味読した。以下、引用箇所は「」、割注は[]で記す。

①葉書 昭和12年9月2日執筆。消印、神奈川 12 9 3 前8-12。横浜市神奈川区鳥越28→長野県須坂町大字須坂760。

葉書を書いた前日は震災記念日。9月6日から2学期が始まる。「また、つまらないもの」と謙遜し、「正述心緒歌の心緒の内容について(一)」が掲載されている『明日香』2巻9号、古今書院、(昭和12年9月)の別便送り状である。犬養の卒論は「萬葉集の正述心緒歌の研究」。これをもとに『明日香』に昭和12年3・4・9・10月と翌年4月の5回に分けて、掲載したのである。

「当地毎日出征列車五六回づつ下を去って居ります。」とあるのは、8月31日に北支那方面軍・第1軍・第2軍の編成ならびに華北派遣が命令されたためである。また、「こちらの防空演習は十六七日頃のやうです。」と書いている。日中全面戦争の拡大激化が読み取れる。

②手紙(便箋8枚) 昭和12年10月28日執筆。消印、封筒表未見。封筒裏に十月二十八日の日付、便箋末尾に「十月二十八日夜」の記述がある。

田邊一家は9月に赤倉温泉香岳樓[現、香嶽樓]に宿泊し、「新潟関川」の消印の便りを犬養に送った。一家は野尻湖や柏原の一茶の家を訪ねている。犬養は旅情に浸りつつも、時局の現実を、次のように報告している。東神奈川駅軍用列車歓送迎客轢死事故の記述によって、この手紙が昭和12年に執筆されたと

分かる。「信州の方は出征應召の方 どんな模様でせう。横浜は、たとへばこの下の街からだけでも三四十人出てゐる位で、出征の見送りで伊セ[勢]佐木町から櫻木町にかけて身動きのできない時もありました。ここからは毎日下をゆく汽車が見えますが、昨今などでも一日に何本の出征列車があるか分らない程です。昨日は学校の帰りに東神奈川の駅で見送りました。今朝新聞で見れば、その汽車がヨコハマ[横浜]駅にはいる前に、蕪進し来る湘南電車のため、線路上の見送りの人が即死二十七名、重軽傷三十二名ひかれた椿事がありました。昨夜はすこし霧が濃かったため見透しがきかなかつたとありました。車輪にくひ入った履物や日ノ丸の旗などの寫真もあはれです。」

犬養は『東京朝日新聞』を購読していた。新聞は即死者27人と報道しているが、正しくは死者25人である。

続いて、勤務校の同僚教員が「北支」に出征中で、彼の第二人が戦傷入院中と記している。うち一人の弟はクリークで左腕と腰と鉄兜に1発被弾した。もう一人の弟は肩貫通銃創したが、敵前渡河した。犬養は友田恭介のような話だという。友田恭介は本名、伴田五郎。新劇俳優。昭和12年10月6日、上海郊外の呉淞で戦死。世人は熱狂し、西條八十は長詩「呉淞クリークのほとりに立ちて」(『戦火にうたふ』日本書店、1938年)を発表し、日活多摩川撮影所では映画「敵前渡河噺! 友田伍長」(1938年2月上映)が制作された。

友人の「釘本[久春]君」は近衛の及川部隊の輜重兵として、北支か上海かに出征した。釘本は戦後、国立国語研究所創設に尽力した国語・国文学者。犬養は「光り消えぬ」(『日本語』8巻7号、国語を愛する会)という短い追悼文を寄せている。

当時の横浜はまだそれほど緊迫感もなく、犬養は築地小劇場で中塚節「土」や、横濱寶塚劇場で三好十郎「彦六大いに笑ふ」などを観劇している。また、アナートル=フランスの童話『少年少女』は、鳥崎藤村の童話を思わずと読後感を記している。昭和12年に三好達治[訳]の岩波文庫が出版されると、直ちに購入して読んだのだ。

生前、犬養は築地小劇場の思い出を学生たちによく話した。鳥崎藤村は最も好き作家で、「大阪大学万葉旅行の会」は4年に1度「木曾藤村旅行」を実施した。

追伸で「明日香」の十月号を送るとあるが、これは「正述心緒歌の心緒の内容について(二)」が掲載された『明日香』2巻10号(古今書院、昭和12年10月)である。

③葉書 昭和14年8月11日執筆。消印、東京小田原間8月11日。川崎市岡上 東光院方→長野県須坂町東町。

この年の夏休み、犬養は勤務校の夏期講習を終えると信州に出かけて執筆活動をしようとしたが、妻の真が病気のため横浜に近い鶴見川上流の寺、川崎市(現、麻生(あさお)区岡上(おかがみ)217)の真言宗岡上山(おかのぼりさん)東光院寶積(ほうしゃく)寺に引き籠った。阿邊殿という本堂の一隅に机を置いたが、「ひるまはとてもしづかで涼しくてよいのですが、夜は、あまりしづかすぎて大変です。ほとけさまの前のただひとつの電燈のもとに机を置いてみます。がたっと音がしても天井を見上げてしまひます。」生前犬養先生は私に、「夜が怖くて怖くてたまらなかつた。本堂は死者の世界なので、住職に頼みこんで本堂から庫裡に居場所を替えてもらった。」と話した。

この葉書の文面から犬養はまず、「高橋轟麻呂」(『解釈と鑑賞』32巻10号、至文堂、昭和14年10月)の執筆に取り掛かっていたことが判る。田邊に東歌と磐姫の原稿の執筆進捗状況を問うている。犬養孝の弟の廉はこの時、長野県戸隠中社に行っていた。

④葉書 昭和14年9月21日執筆。消印、神奈川 14 9 22 前8-12。横浜市神奈川区鳥越28→長野県須坂町東町。

この葉書は前述の③の葉書に続いて投函された。犬養は、東光院で「高橋轟麻呂」を脱稿したあと、「吉備の黒日責」(『明日香』4巻10号、古今書院、昭和14年10月。再録『日本女流文学評論』越後屋書房、昭和18年8月)を執筆した。これら2編のため「森本さんのお仕事」まで手が回らず、「巻三の途中をやっている」状況であった。2学期が始まると「忙しくて忙しくてまるで高い山でも登るみたい」になり、原稿のための時間捻出の困難さを嘆いている。昔も今も、中等学校教員の多忙さは変わらない。

「森本さんのお仕事」とは、森本治吉『萬葉集大辞典

第一巻(ア行)](日本古典全集刊行會、昭和18年6月20日)の手伝いであった。この大辞典の森本の「序言」に、協力者の一人として犬養孝の氏名が記述されている。犬養は万葉地名の手伝いをしたのであろうが、具体的な事例として、アで始まる地名の一部に地図を手書きで作製している。「大阪大学万葉旅行の会」初期にガリ版刷りで作製された、テキスト地図の淵源と言えよう。

この大辞典には、阿可見夜麻(あかみやま)・秋津野(あきつぬ)・安騎野(あきぬ)・阿胡根能浦(あこねのうら)・浅香(あさか)・且妻山(あさづまやま)・蘆城(あしき)・葦北(あしきた)・安志保夜麻(あしほやま)・明日香(あすか)[下図参照]・安蘇(あそ)・阿太(あた)・安治麻野(あぢまぬ)・相坂(あふさか)の14図とア部補遺図としての年魚市潟(あゆちがた)・安良礼(あられ)・有間(ありま)の3図、合計17図が描かれている。しかしイ〜オには地図は1枚も作製されていない、この大辞典の第2巻以降は未刊に終わった。

葉書の末尾に、犬養は「明日から不二の演行で、五日ほど出かけます。」と書いている。『神中・神高・希望ヶ丘高校百年史 資料編』(神奈川県立希望ヶ丘高等学校百周年記念事業合同実行委員会、1998年7月10日)には、「九月二十二日 四年生全員、本日より二十五日まで富士山麓駒門厩舎において野外演習。三森・村田教官、古谷・犬養教諭が引率した。」とある。犬養は4年生の担任団の一員であった。

富士山麓駒門厩舎は現、御殿場市駒門5-1に位置し、陸軍重砲兵學校富士分教所にあった。現在は陸上自衛隊駒門駐屯地となり、戦前の厩舎は改修されて今も車両工場として利用されている。私はネットオークションで、戦前の駒門厩舎の絵葉書を3枚見つけた。

⑤葉書 昭和14年9月27日執筆。消印、神奈川 14 9 28 前8-12。横浜市神奈川区鳥越28→長野県須坂町東町。

前述④に続いて投函した礼状葉書。9月25日に駒門厩舎から帰宅すると、田邊からブドウが届いていた。「四五日をわれもこうやのぎくの裾野の中に楽しく過して来ました。」そのうえさらに今度は模擬試験など校務を次々とこなさなければならないので、「森本治吉からの頼まれ」仕事に本当にいつまでも出来上らず困っている。屈指の進学校教員の愚痴である。

以上の横浜時代の5書簡は、犬養と田邊が同じく多忙な教員生活のなかで、『万葉集』研究を続けようとする強い意志と、万葉研究と北アルプスの縁(えにし)による友情とを物語っている。「犬養万葉」の原初史料である。

二人は合著で、犬養が笠金村、田邊が高市黒人を執筆した『笠金村・高市黒人(日本文学評伝全書)』(青梧堂、昭和19年1月10日)を上梓した。このシリーズの企画には森本治吉が主導的役割を果たしている。森本は犬養にとって第五高等学校と東京帝国大学の二重の先輩・先達であった。

犬養の田邊に寄せる友情は、戦後も犬養が田邊の著書の書評・紹介記事を3編著していることにも見られる。

